

W207c 共生連星 AG Pegasi の 2015 年増光時における分光観測

田邊健茲、小木美奈子、安藤和子（岡山理科大学）

AG Peg（ペガサス座 AG 星）は M 型巨星と白色矮星の共生連星として知られている。この星は、1821 年に 9 等級の変光星として発見され、その後 1855 年頃増光が始まって、1871 年には 6 等級まで明るくなりその後 100 年ほどかけて緩やかに減光した。

当初、この変光星は Cannon や Fleming によって P Cygni 型と考えられてきたが、その後 20 年間に B 型、O 型星、さらには TiO の吸収線を示したため、この星は Wolf-Rayet 星の様相も呈してきた（Kenyon1985）。現在ではこの星は M 型巨星と白色矮星の連星系（共生連星；S-type）かつ Symbiotic Nova（共生星新星、あるいは very slow nova）に分類されている（たとえば Warner1995）。

この星が 2015 年 6 月に約 7 等に増光していることが発見され（前原 vsolj-219、2015.6.24）、我々岡山理科大学チームは低分解能可視分光器 DSS-7 を用いてスペクトルを取得してきた。

観測されたスペクトルは水素の Balmer 線が優勢であるが、過去の分光データに $H\alpha$ が得られていないため、比較が難しい。なお、この $H\alpha$ の輝線はその相対強度が強くなる傾向にあるので、12 月現在もなお増光している可能性がある。詳細はポスターで発表する。